

## 41

## 日本初の女性看病人誕生の背景

— 戊辰戦争時壬生の看病人 —

日下 修一

獨協医科大学看護学部

## 1. 目的

現存する資料から、日本で最初に女性看病人が雇用されたのが慶応4年4月24日、戊辰戦争の壬生城内（現在の栃木県下都賀郡壬生町）であった。この女性看病人に関する資料は弘田親厚著『慶応四戊辰 会津征討日記 弐の巻』のみであり、どのような女性が雇用されたのかは不明である。本研究はそうした壬生の女性看病人にどのような女性が雇用されたかを検討し、それ以降の看護婦に繋がらなかった要因を考察することを目的とした。

## 2. 方法

弘田親厚著『慶応四戊辰 会津征討日記 弐の巻』（原本複写）を中心に文献研究を行った。

## 3. 結果

慶応3年10月14日大政奉還。慶応4年1月3日鳥羽伏見の戦い始まる。同2月7日旧幕府歩兵2,000名脱出して下野方面へ。日光奉行所農兵を編成。慶応4年3月中旬～下旬、下野国河内郡、都賀軍、芳賀郡など（現栃木県南部）で打ち壊し始まる。同4月1日新政府軍総督府宇都宮派兵決定（香川敬三ら200名）、世直し一揆宇都宮藩領に波及。同4月5日鹿沼に押し寄せた一揆勢を宇都宮藩兵が鎮圧。

慶応4年4月19日大鳥軍宇都宮城攻略。同4月21日夜旧幕府軍（伝習隊、砲兵隊など600名）は宇都宮城から7キロ南の幕田村（現宇都宮市）に陣地を築き、新政府軍（因州、土州、壬生など500名）はその南の安塚（現栃木県下都賀郡壬生町、宇都宮市に接する）に陣を構築した。同4月22日安塚の戦い。旧幕府軍が敗れた。新政府軍穿刺16名、負傷43名、旧幕府軍60余名、負傷78名。新政府軍が勝利したが、途中、壬生城には負傷兵が運ばれ、手当を受けた。

慶応4年2月14日に土佐藩は出兵に際して600名のうち、病院組織として医師10名、歩卒（衛生兵）30名を出した。壬生城での土佐藩の兵員は230名程度、医師は5名、歩卒0名であった。

慶応4年4月24日に「銃創看病人として此地の婦人九人雇入養生局に差置ける」（弘田親厚著『慶応四戊辰 会津征討日記 弐の巻』）、銃創による傷病兵の看護のために女性を9人雇入れたことが分かる。

## 4. 考察

慶応4年4月24日は横浜大病院で女性看病人を雇入れた同年閏4月17日より約1か月早いと、日本で最初に女性看病人が誕生した。安塚の戦いは戊辰戦争の中で、最も大きな戦いであり、傷病兵も多数出ており、病院の医師や歩卒も不足しており、安塚の戦いの中で、壬生近隣の男性も徴用され、不足していたことが、女性看病人を求める契機となった。また、「雇用」した背景には、同年3月頃から下野一帯に生じた農民一揆により、無報酬で住民を用いることは危険であったと考えられ、女性看病人として雇用することになった。このため、報酬をもらって看病する住民は農民や町民の子女である可能性が高く、銃創の看病人としたのは銃創が刀などによる切創よりも治療が困難で、重症であった可能性が考えられる。このため、看病する女性に、いたずらする可能性も低く、女性看病人を雇用できた可能性が考えられる。

会津戦争以降でも、女性看病人の記載はあるため、女性看病人を雇用する風潮はあったと考えられるが、西南戦争時の博愛社の活動では男性看病人が活躍しており、日清戦争以降でも看護婦を前線に派遣できなかった事実を考えると、女性が看病人となるという形式は戊辰戦争における一時的なものと考えられ、その後の看護婦の誕生には関連がないと考えられる。その要因として、未訓練の看病人であることが考えられる。

## 5. 結論

日本で初めて雇用された女性看病人は壬生近辺の農民や町民の子女である可能性が高い。また、戊辰戦争中雇用された女性看病人は未訓練であり、その後の看護婦の誕生には寄与していない。